

平成三十年六月十日発行  
皇學館論叢第五十一卷第三号  
抜刷

『源氏物語』における言葉の様相

—— 「きよら」な夕霧の「きよげ」な姿 ——

古  
川  
幸  
奈

## 『源氏物語』における言葉の様相

——「きよら」な夕霧の「きよげ」な姿——

古川 幸 奈

### □ 要 旨

『源氏物語』の登場人物のすばらしさを形容する言葉として、「きよら」「きよげ」がある。従来、この二つの言葉は、「きよら」光源氏の一族「きよげ」頭中将の一族」といった、「血筋」を表す言葉として捉えられてきた。しかし、本来なら用いられるはずのない光源氏と夕霧にも、「きよげ」の用例が見出される。そこで、その「きよげ」が表している意味について検討した。

「血筋」で考えるのであれば、夕霧は双方の「血筋」であるため、「きよら／きよげ」が併用されるのは、ある意味当然である。ただ、光源氏の「きよげ」の用例を視野に入れた時、光源氏の「若い」「きよげ」な姿と夕霧の「きよげ」な姿が重なることから、「血筋」という言葉に含まれる意味が僅かに変化する。具体的にいうと、夕霧に用いられている「きよら／きよげ」が、言葉は違えども、どちらも光源氏に通ずるものになるということである。これは、『源氏物語』がもつ、言葉の特異性だと思われる。

### □ キーワード

きよら きよげ 光源氏 夕霧

## 一 はじめに

『源氏物語』の登場人物のすばらしさを形容する言葉として、「きよら」「きよげ」がある。一般的な辞書によると、これらは、言葉としては別のものでありながら、その意味するところはほぼ同じ内容を表す言葉として認識されている。例えば『角川古語大辞典』<sup>(注1)</sup>を見ると、

きよら 【清ら】名・形動ナリ 美麗であること。また、そのさま。

きよげ 【清げ】形動ナリ さっぱりしているさま。整つてはいるが、かたくるしくはなく、理想的なさまをいうことも多い。

といった解説が付されている。このように「きよら」と「きよげ」は、それぞれ別語でありながら、いずれも視覚的「美しさ」を表す言葉として捉えられていることがわかる。

しかし、『源氏物語』においては、そうではない。「きよら」と「きよげ」は、意味において、ある基準のもとに明確に異なるものとして使い分けがなされている。その基準とは、「誰の血を引いているか」である。

「きよら」と「きよげ」の違いについて、鈴木日出男は、

①「きよら」は第一級の気品ある美をいう。それに対して「きよげ」は第二流の美をさす。前者が、多く天皇・皇子・皇女などの高貴な清浄美を表すのに用いられるのも、そのためである。源氏は誕生以来、「きよらなる玉の皇子」とたたえられ、終生その「きよら」の美が一貫している。「きよげ」は、身分高からぬ従者程度にまで用いられて、さっぱりした美しさを表している。<sup>(注2)</sup>

と解説している。ポイントは二つある。一つは、「きよら」は天皇・光源氏の一族に限定して用いられる一級の美を表す言葉であり、「きよげ」は、光源氏のライバルである頭中将の一族に用いられる二流の美を表す言葉であること。もう一つは、その「きよら」「きよげ」の使い分けに関する法則性は、『源氏物語』に一貫して見られるものであるということである。こうした見解は、必ずしも鈴木のみに見られるものではなく、犬塚旦が、

かくて「清ら」「清げ」を対象人物の面よりかへりみる時、そこにはまことにはつきりしたつかひわけが見出されるのであつて、ひとまづ「清ら」は源氏型、「清げ」は頭中将型と大別してさしつかへなからうと思ふ。(注3)

と唱えて以降、細部に関しては多少の揺れはあるものの、その大枠に関しては動かない『源氏物語』研究の通説ともいべきものである。(注4)

さて、本論文が問題とするのは、今確認してきた通説そのものに対してである。実のところ、「きよら」「きよげ」のすべての用例を見ていくと、先に述べた法則性に当てはまらない用例が少なからず存在することに気づく。

(夕霧が光源氏の) 御前に参りたまへれば、かのことは聞こしめしたれど、何かは聞き顔にもとおほいて、(源氏は夕霧の顔を) ただうちまもりたまへるに、(夕霧は) いとめでたくきよらに、このころこそねびまさりたまへる御盛りなめれ、さるさまの好きごとをしたまふとも、人のもどくべきさまもしたまはず、鬼神も罪ゆるしつべく、あざやかにものきよげに、若う盛りにほひを散らしたまへり。(夕霧・⑥・八一頁)

夕霧が光源氏の元を訪れた時のことである。光源氏は夕霧を見て、心の内で「立派で気品があり、鬼神といえども見逃してくれそうな鮮やかな美しさをもっている。」と思う。

この場面で問題となるのは、夕霧に見られる「きよら」と「きよげ」の併存である。第一に、夕霧という人物は、光源氏の子息である。つまり、『源氏物語』の法則性に従うならば、本来夕霧に用いられるのは「きよら」のみであり、

「きよげ」は用いられないはずである。しかし、この場面の夕霧には、「きよら」だけでなく「きよげ」も用いられているのである。それは、なぜなのか。

本論文の目的は、右の引用に見られるような夕霧に用いられる「きよら」「きよげ」の矛盾に焦点を当て、従来、通説とされてきた「きよら」「きよげ」の法則性の新たな意味を明らかにする点にある。

## 二 「きよら」な一族と「きよげ」な一族

先に述べたように、『源氏物語』には「光源氏ニきよら／頭中将ニきよげ」という法則性がある。人物に対する用例を見ていくと、「きよら」は七五例（内、五八例が光源氏の一族）、「きよげ」四八例（内、一九例が頭中将の一族）となっており、従来（注5）の指摘が正しいことは、ある程度認められることが分かる。このことは、以下に取り上げる例を見ても分かる。

そこで、実際に「光源氏の一族ニきよら」の用例を確認してみよう。初めに示す用例は、「光源氏」の用例である。《1》さきの世にも、御契りや深かりけむ、世になくきよらなる玉の男御子（ニ光源氏）さへ生まれたまひぬ。

（桐壺・①・十二頁）

《2》入りかたの月いと明きに、いとどなめまかしうきよらにて、ものをおぼいたる（光源氏の）さま、虎狼だに泣きぬべし。

（須磨・②・二〇八〜九頁）

《1》は生まれたばかりの光源氏、《2》は物思いに沈んでいる光源氏が描かれている。このように、「光源氏ニきよら」であることが確認できるであろう。

次に、光源氏と葵上（＝頭中将の妹）の子息である「夕霧」の用例を確認する。

《3》……宰相の中将（＝夕霧）、同じ色の今すこしまやかなる直衣姿にて、纓巻きたまへる姿しも、またいとなまめかしうきよらにておはしたり。  
（藤袴・④・一八五頁）

《4》あらまほしくうつくしげなる御あはひなれど、女（＝雲居雁）は、またかかる容貌のたくひも、などかなからむと見えたまへり。男（＝夕霧）は、際もなくきよらにおはす。  
（藤裏葉・④・三〇三頁）

《3》は喪服を着ている夕霧、《4》は雲居雁と一緒に居る夕霧が描かれている。光源氏と同様に、「夕霧」きよらであることが分かる。

また、光源氏と藤壺（＝光源氏の義母）の子息である「冷泉帝」の用例にも目を向けてみよう。

《5》……（冷泉帝の）、御髪はゆらゆらときよらにて、まみのなつかしげにほひたまへるさま、おとなびたまふまに、ただかの（＝源氏）御顔を脱ぎすべたまへり。  
（賢木・②・一五七頁）

《6》（冷泉帝は）十一になりたまへど、ほどよりおほきに、おとなしうきよらにて、ただ源氏の大納言の御顔を二つにうつしたらむやうに見えたまふ。  
（濤標・③・一三頁）

《5》は冷泉帝の美しい髪、《6》は大人びた冷泉帝が描かれている。冷泉帝は公には光源氏の子息とされておらず、光源氏の父親である桐壺帝の子息とされている。しかし、どちらにせよ天皇家に連なる「きよら」を持つていることが確認できる。

では、光源氏と明石上の息女である「明石中宮」はどうだろうか。

《7》……姫君（＝明石中宮）はきよらにおはしませど、まだ片なりにて、生ひ先ぞおしはかられたまふ。

（玉鬘・③・三〇六頁）

《8》……(明石中宮は)いとなまめかしくきよらにて、例よりもいたくしづまり、ものおぼしたるさまに見えたまふ。  
(若菜上・⑤・九五〜六頁)

《7》は幼い頃の明石中宮、《8》は考え込んでいる明石中宮が描かれている。光源氏の唯一の息女である明石中宮もまた、光源氏の「きよら」を継ぐものであったことが分かるであろう。

以上、「光源氏の一族」きよら」の用例を確認してきた。では、続けて「頭中将の一族」きよげ」の用例も確認しよう。

次に示す用例は、「頭中将」の用例である。

《A》……(頭中将は)をごとこのたまひなすをも知らず、同じき大臣と聞こゆるなかにも、いときよげのものものしく、はなやかなるさまして、おぼろけの人見えにくき御けしきをも見知らず、……(常夏・④・一〇六頁)

《B》……(頭中将が)うちほほゑみたまへる、けしきありて、にほひきよげなり。(藤裏葉・④・二八五頁)

《A》は冗談を言っている頭中将、《B》は微笑んでいる頭中将が描かれている。このように、「頭中将」きよげ」であることが分かる。

また、頭中将と四の君の子息である「柏木」の用例も確認する。

《C》月隈なくさし上がりて、空のけしきも艶なるに、(柏木は)いとあてやかにきよげなる容貌して、御直衣の姿、好ましうはなやかにて、いとをかし。  
(藤袴・④・一九七頁)

《D》容貌いときよげに、なまめきたるさましたる人(＝柏木)の、用意いたくして、さすがに乱りがはしき、をかしく見ゆ。  
(若菜上・⑤・一二五〜六頁)

《C》は直衣姿の柏木、《D》は蹴鞠で活躍した柏木が描かれている。頭中将と同じく、「柏木」きよげ」であること

が確認できる。

そして、頭中将と夕顔の息女である「玉鬘」にも、この法則は適用される。

《E》もの思ひに沈みたまへるほどのしわざにや、(玉鬘の) 髪の裾すこし細りて、さはらかにかけられるしも、いともきよげのきよげに、……

(初音・④・一六頁)

《F》屏風なども皆曇み寄せ、ものしどけなくしたるに、日のはなやかにさし出でたるほど、けざげと、ものきよげなるさましてあたまへり。

(野分・④・一三六頁)

《E》は物思いに沈んだ玉鬘、《F》は坐っている玉鬘が描かれている。玉鬘は光源氏に養女として迎えられるのだが、用例を見ると、「頭中将きよげ」の血筋であることが確認できる。

以上の用例から、「頭中将きよげ」も成り立つことが分かる。

このように『源氏物語』において「きよら／きよげ」が「光源氏／頭中将」という法則性のもとに明確に使い分けられていることが確認できるが、こうした使い分けは、一見、矛盾とも思われるような現象を生み出すことがある。その一つが、「夕霧きよげ」というものである。

先にも述べたように、夕霧は、光源氏の子供であることから、「きよら」に属する人物である。ただ、『源氏物語』における夕霧の形容を抽出していると、本来「きよら」と形容されるべき夕霧に、なぜか「きよげ」が用いられる場合がある。

《a》(夕霧は) 軽々しうも見えず、ものきよげなるうちとけ姿に、花の雪のやうに降りかかれば、うち見上げて、しをれたる枝すこし押し折りて、御階の中のしなのほどにあたまひぬ。督の君(＝柏木) 続きて、……

(若菜上・⑤・一二六頁)



《b》……大将（≡夕霧）も督の君（≡柏木）も、皆おりたまひて、えならぬ花の蔭にさまよひたまふ夕ばえ、いときよげなり。  
（若菜上・⑤・一二五頁）

《c》（落葉の宮は）いとあてに女しう、なまめいたるけはひしたまへり。男（≡夕霧）の御さまは、うるはしだちたまへる時よりも、うちとけてものしたまふは、限りもなうきよげなり。  
（夕霧・⑥・九〇頁）

《d》……忍びて（光源氏は紫上に）、「中将（≡夕霧）の朝明の姿はきよげなりな。ただ今はきよげはなるべきほどを、かたくなしからず見ゆるも、心の闇にや」とて、……。  
（野分・④・一三四頁）

このように、光源氏の子供であるはずの夕霧に「きよげ」が結びついている例を見いだすことができるのである。ただ、ここで断つておくべきは、こうした用例は、かならずしも、これまで繰り返し述べてきた「光源氏≡きよら／頭中将≡きよげ」の法則性を否定するものではないということである。なぜなら、夕霧は、光源氏系列の人物であると同時に、頭中将系列の人物でもあるからである。

ポイントは、夕霧の母親にある。夕霧の母親は、左大臣の娘である葵上であった。そして、「きよげ」の根幹に位置する頭中将もまた、父は左大臣であり、母も葵上と同じ大宮であった。つまり、葵上と頭中将は同腹の兄妹であり、その意味において葵上は頭中将系列の人物であるといえる。

なぜ、光源氏系列に属しているはずの夕霧に、頭中将系列の「きよげ」が用いられることがあるのか。その理由は、彼の母葵上が頭中将系列に属する人物であったからである。光源氏を父に持ち、頭中将系列に属する葵上を母に持つ夕霧が、「きよら」と「きよげ」を併せ持つのは、ある意味当然なのである。

故に、夕霧に見られる「きよら」「きよげ」の併用は、血筋で考えるのであれば、むしろ『源氏物語』に「きよげ／きよら」の法則性が認められることを証明しているといえる。

以上、従来から指摘されてきた「光源氏」きよら／頭中将「きよげ」の法則性について確認してきた。ただ、『源氏物語』には、その法則性をもつても理解できない用例が存在する。それが、「光源氏」きよげ」の用例である。「きよら／きよげ」の法則性の根幹ともいうべき光源氏。しかし、その光源氏にも、なぜか「きよげ」の用例が見出されるのである。

### 三 「光源氏」と「夕霧」と

繰り返し述べてきたが、『源氏物語』において、光源氏は「きよら」と結びつく人物である。そして、「きよら／きよげ」の法則性は、光源氏の「きよら」さが終始ほほ一貫しているが故に成り立つものである、と言っても過言ではない。だが、「ほほ」と述べたように、「光源氏」きよげ」の用例が二つだけ存在することも、また事実である。

なぜ、終始「きよら」であるはずの光源氏に、「きよげ」の用例が見出されるのか。まずは、一つ目の「光源氏」きよげ」の用例を確認する。

《I》【光源氏】「いかにぞや。宮（＝螢兵部卿宮）は夜やふかしたまひし。いたくも馴らしきこえじ。わづらはしき氣添ひたまへる人ぞや。人の心やぶり、ものあやまちすまじき人は、かたくこそありけれ」など、（玉鬘に）活けみ殺しめおはする（光源氏の）御さま、尽きせず若くきよげに見えたまふ。（螢・④・六六～七頁）

この場面には、光源氏と玉鬘の二人が描かれている。ここで光源氏は玉鬘に、「螢兵部卿は厄介なところがおありの人ですよ。」と注意を促している。光源氏にとって玉鬘は養女であるので、養女を心配する「父親」の姿として受け取るのであれば、何の問題も無い。しかし、問題は光源氏が玉鬘を養女として見ていないところにある。

『源氏物語』における言葉の様相（古川）

……この君（玉鬘）は、人の御さまも、気近く今めきたるに、（光源氏は）おのづから思ひ忍びがたきに、をりをり、人見たてまつりつけば疑ひ負ひぬべき御もてなしなどは、うち交るわざなれど、……（蛭・④・六六頁）これは、「光源氏きよげ」の用例の直前に描かれている光源氏と玉鬘の様子であるが、二重傍線部を見ると、光源氏が玉鬘を一人の「女」として見ていることが分かる。では、ここで描かれている光源氏は、「父親」でなければ何なのか。参照したいのは、「夕霧きよげ」《c》の用例である。

《c》（落葉の宮は）いとあてに女しう、なまめいたるけはひしたまへり。男（夕霧）の御さまは、うるはしだちたまへる時よりも、うちとけてものしたまふは、限りもなうきよげなり。（夕霧・⑥・九〇頁）

これは、夕霧が落葉宮と共に過ごしている様子を描く場面である。この時、「男（夕霧）」の「御さまきよげ」と描かれていることが分かる。そして、この二人の用例には、ある二つの共通点が存在する。一つ目は、「きよげ」の前に「御さま」があるという点。二つ目は、同じ場面に「女」が存在するという点である。つまり、「きよげ」な二人の「男」は、女と共に過ごすことにより、その「御さまきよげ」となるのである。この点から考えると、光源氏は「父親」ではなく一人の「男」として、玉鬘を心配していたからではないかと思われる。続けて、二つ目の「光源氏きよげ」の用例を確認する。

《II》……（夕霧が）また寄りて見れば、（光源氏は紫上に）もの聞こえて、大臣（源氏）もほほゑみて（紫上を）見たてまつりたまふ。（夕霧の目に光源氏は）親とおおぼえず、若くきよげになまめきて、いみじき御容貌の盛りなり。（野分・④・一二六頁）

この場面は、光源氏と紫上と一緒に居る所を、夕霧が垣間見る場面である。二人が微笑み合っている姿を見てしまった夕霧。その時、夕霧の目には、親とも思えない「光源氏きよげ」な姿が映っていた。では、夕霧にとって、親と

も思えない光源氏は何だったのか。「光源氏きよゆげ」《Ⅱ》の用例の直前に描かれている、夕霧の心中を描く場面を参照すると、

……（紫上は）かく見る人ただにはえ思ふまじき御ありさまを、（光源氏は）いたり深き御心にて、もしかかることもやおぼすなりけり、と（夕霧は）思ふに、……  
（野分・④・一二五頁）

とある。光源氏が自分を紫上と近づけないようにしていたのは、万が一にも自分が紫上を垣間見て心を動かすことがないように懸念されたことだったのだ、と夕霧が思う様子が描かれている。つまり、この時、夕霧は光源氏の妻紫上を「女」として認識していたのである。故に、夕霧にとって、その夫である光源氏は「父親」ではなく、一人の「男」であつたのだと思われる。

さて、ここからが本題である。「光源氏きよゆげ」だと描かれる時。それは、光源氏が「男」として描かれている時であるということは確認できた。しかし、ここで着目したいのは、「光源氏きよゆげ」だと認識していたのが夕霧である、という点である。先に述べたように、夕霧が父光源氏を一人の「男」として認識していたのであれば、その妻紫上を一人の「女」として認識していたであろうことは言うまでもない。現に、紫上を垣間見た時の夕霧の心情は、次に引用する用例に描かれている。

……はつかに見ゆる御袖口は、さにこそは（紫上に）あらめと思ふに、（夕霧は）胸つぶつぶと鳴るこちするも、うたてあれば、ほかさまに見やりつ。  
（野分・④・一三四頁）

このように、夕霧は紫上を見て、心を焦がしていたのである。そんな父親の妻に想いを馳せる息子の姿を見て、光源氏は次の場面でこう述べている。

《d》……忍びて（光源氏は紫上に）、「中将（きよゆげ）の朝明の姿はきよげなりな。ただ今はきよげはなるべきほどを、

『源氏物語』における言葉の様相（古川）

かたくなしからず見ゆるも、心の闇にや」とて、……

(野分・④・一三四頁)

これは、先にあげた「夕霧ニきよげ」《d》の用例であるが、光源氏は夕霧の姿を「朝明の姿」、つまり、女の許から朝帰って行く「男」の姿だと評しているのである。故に、この時、光源氏は夕霧を「息子」ではなく一人の「男」として見ていたのであろう。要するに、光源氏と夕霧は、互いを「親子」ではなく一人の「男」と認識した時、互いを「きよげ」だと認識していたのである。

以上のことから、「光源氏ニきよげ」《I》《II》と「夕霧ニきよげ」《c》《d》の用例が、二人の結びつきを強く表しているものであることが分かる。

さらに、それらを踏まえた上で、再度確認したい用例が一つある。それは、冒頭で挙げた、光源氏が「夕霧ニきよら／きよげ」と見ている用例である。そして、この用例は「きよら／きよげ」が、唯一併存している用例でもある。

……(源氏は夕霧の顔を) ただうちまもりたまへるに、(夕霧は) いとめでたくきよらに、このころこそねびまさりたまへる御盛りなめれ、さるさまの好きごとをしたまふとも、人のもどくべきさまもしたまはず、鬼神も罪ゆるしつべく、あざやかにものきよげに、若う盛りににはひを散らしたまへり。(夕霧・⑥・八一頁)

光源氏は夕霧を見て、心の内で「立派で気品があり、浮気沙汰を引き起されてもなお、鮮やかで若々しい美しさをもっている。」と思う。

ここで着目したいのが、太線「若し」という言葉である。この、「若し」という言葉は、「光源氏ニきよげ」の用例にも必ず記されている語である。つまり、この用例は、「夕霧ニきよげ」な姿が「光源氏ニ若い＋きよげ」な姿に似ていることを示すものだということが分かる。言い換えると、夕霧に用いられている「きよら／きよげ」は、結局のところ、どちらも光源氏に通ずるものだったのである。

光源氏と夕霧は、親子である。これは、従来の法則通り、「きよら」が「血筋」を表すことによって示されている。そんな「きよら」な二人に用いられる「きよげ」が表している意味。それは、二人に共通する「性質」を表しているのだと思われる。

故に、光源氏と夕霧に共通する「きよげ」とは、好き・ことに興じる二人の、盛りある「若い」「男」としての姿を連想させる言葉として用いられているのだといってよいのではないだろうか。

#### 四 おわりに

従来、「きよら」と「きよげ」は、「光源氏の一族≡きよら／頭中将の一族≡きよげ」という法則性のもと、「血筋」を表す言葉であると考えられてきた。事実、「きよら」は光源氏・夕霧・冷泉院・明石中宮といった「光源氏の一族」に、「きよげ」は頭中将・柏木・玉鬘といった「頭中将の一族」に用いられていることから、その指摘がある程度正しいものであることに違いはない。しかし、その法則性だけでは処理しきれない用例があることも、また事実である。そこで、本論は「きよら／きよげ」が併存する「夕霧」に着目した。だが、その理由を従来の研究と同様に「血筋」で考えると、夕霧に「きよげ」が用いられていることにはある意味正しいということが分かる。何故なら、夕霧は「光源氏≡きよら」と「頭中将≡きよげ」、双方の血を継ぐ人物だからである。ただ、その法則性をもつてしても理解できない用例が見出される。それが、「きよら／きよげ」の法則性の根幹ともいえるべき光源氏に存在する、「きよげ」の用例である。

そして、「光源氏≡きよげ」の用例から、二つのことが明らかとなる。一つ目は、「きよら」な光源氏と夕霧は、女

を想う一人の「男」として描かれる時、「きよげ」な姿で描かれるということ。二つ目は、光源氏と夕霧が、互いを「きよげ」だと認識する時、それは互いを親子ではなく一人の「男」として認識している時だということである。

また、「夕霧ニきよら／きよげ」の用例における「若し」という言葉から、「夕霧ニきよげ」な姿が、「光源氏ニ若いニきよげ」な姿を示すものであったことが明らかとなる。つまり、夕霧に用いられている「きよら／きよげ」は、言葉は違えども、どちらも光源氏に通ずるものだったのである。<sup>(注6)</sup>

以上のことから、夕霧に使われている「きよら／きよげ」には、二つの意味が含まれていると考える。一つ目は、「光源氏／頭中将ニきよら／きよげ」といった、従来の研究通り「血筋」を表す言葉であること。そして、二つ目に新たな意味を付したいと思う。「光源氏／夕霧ニ(若い+)きよげ」は、親子そろって好きごとに興じる二人の、盛りある「若い」「男」としての姿を連想させる言葉だということである。

『源氏物語』において、夕霧に用いられている「きよら／きよげ」が、光源氏に帰する言葉であること。これは、『源氏物語』がもつ、言葉の特異性だといえる。

「きよら」な夕霧の「きよげ」な姿。それは、「きよら」な血筋と「きよげ」な好色さをもつ父光源氏の、「若々しい姿」に重なるものだったのである。

※『源氏物語』本文の引用は、新潮日本古典集成により、巻名・冊番号・頁数を記した。なお、引用本文中の（ ）内の注記や傍線部等は全て私に付したものである。

注

(1) 『角川古語大辞典』(角川書店 一九八四・三)

(2) 鈴木日出男「読むための重要語句 きよら・きよげ」(『源氏物語ハンドブック』(三省堂 一九九八・三))

(3) 犬塚巨「清ら・清げ私見」(『藝林』6-4 一九五五・八)

(4) 「きよら」「きよげ」に着目した研究としては、

・宮田恵子「源氏物語に於ける「清し・清ら・清げ」」(『学習院大学国語国文学会誌』2 一九五八・三)

・龍富輝子「平安朝文芸における「きよし」「きよらなり」「きよげなり」」(『香椎潟』20 47-63 一九七五・三)

・木幡紀子「きよら」(『源氏物語事典』(大和書房 二〇〇二・五))

・木谷眞理子「鑑賞欄 きよげ・きよら」(『源氏物語の鑑賞と基礎知識』31 梅枝・藤裏葉』(至文堂 二〇〇三・一一))

・福井佳代子「源氏物語における人物評価に関わる美的語彙の研究——「きよら」「きよげ」を中心に——」(『国文橋』38

二〇一一・三)

等がある。

(5) 「きよら」をもって形容された人物は、光源氏一九例、夕霧・匂宮一〇、紫上八例、朱雀院七例、冷泉院五例、薫(一つは匂宮と)・明石姫君三例、女三宮・玉鬘二例、螢宮(光源氏と)・浮舟・中君(匂宮と)・葵上・大宮・頭中将一例となる。

「きよげ」をもって形容された人物は、頭中将・薫五例、夕霧・玉鬘四例、小君(浮舟の弟)三例、柏木、源氏、八宮・夕霧及び頭中将子息二例、夕霧及び頭中将一族・六君・明石上・明石入道・明石中宮腹皇子・匂宮・螢宮・中君・浮舟・中将君・軒端萩・伊予介・妹尼・婿の中將・紀伊守、他主要人物でない十八人が一例、となる。

(6) 人物論の観点から夕霧と光源氏の恋愛の類似性を論じたものとしては、日向「雅」宿世の物語の構造——父と子——(『源氏

『源氏物語』における言葉の様相(古川)



物語の主題」桜楓社 一九八三）がある。

日向は当該論文において、

雲井雁との筒井筒の恋、五節への恋、紫上への思慕、落葉宮への恋という夕霧の恋の系譜は、それぞれ光源氏における紫上、五節、藤壺、女三宮への恋にはほぼ対応させることが可能である。それらが、純愛であり、かつ密通や宿業の翳を帯びる点でも、父源氏と同質の恋を夕霧が生きたと云ってよいのではなからうか。

と指摘している。

（ふるかわ ゆきな・皇學館大学大学院生）